

古代銭貨2

8～9世紀

手原遺跡 tehara

銭 名 和同開珎 わどうかいちん 神功開寶 じんこうかいほう 富壽神寶 ふじゅしんぼう

初鑄年代 和同開珎 和同元年・708年 神功開寶 天平神護元年・765年

富壽神寶 弘仁9年・818年

サ イ ズ 和同開珎 直径(復元) 2.3cm 厚さ 1mm 神功開寶 直径2.5cm 厚さ 1mm

富壽神寶 直径2.3cm 厚さ 1mm

重 量 約 2g～2.5g

材 質 銅銭

概 要 和同開珎は国内で鑄造された皇朝十二銭のうち1番目につくられ、神功開寶は3番目、富壽神寶は5番目につくられたものです。



▲埋納遺構100と埋納遺構102出土の古代銭（写真右端上 神功開寶、右端中央 和同開珎、ほか富壽神寶）

遺構の概要

3種類の古代銭は2014年度に調査された埋納遺構から出土しています。埋納遺構は大型掘立柱建物周辺の広場的な場所から4か所（P100、P101、P102、P103）みつき、地鎮祭祀をした痕跡と考えられます。そのうち古代銭を伴っていたものが2か所（P100、P102）存在しました。

埋納遺構は、建物のセット関係や古代銭の種類、土器の検討からすくなくとも2時期にわたって地鎮祭祀が行われていたことが推測されます。最初に建てられた大型掘立柱建物SB2に伴う埋納遺構P100からは、判読可能であった和同開珎と神功開寶が1枚ずつ出土しています。

2種類の古代銭はいずれも奈良時代（8世紀）のものですが、一緒に出土した土師器の年代から

遺構の年代は平安時代前期（9世紀）と考えられます。全体の枚数としてはおそらく15枚以上存在していたことが痕跡から推測されますが、判読がむずかしくそれぞれの種類、枚数については不明です。

富壽神寶は、後につくられた大型掘立柱建物SB1にともなう埋納遺構P102から出土しています。この埋納遺構は特殊な配置による地鎮行為が行われていたことで注目されています。杯を蓋にした小甕をそれぞれ中央と東西南北の五方に配置し、小甕の中には5枚ずつ富壽神寶を入れていました。さらに五方配置された隙間となる四隅に杯を伏せて九方配置にし、最後に燈明皿や土玉を埋納しています。

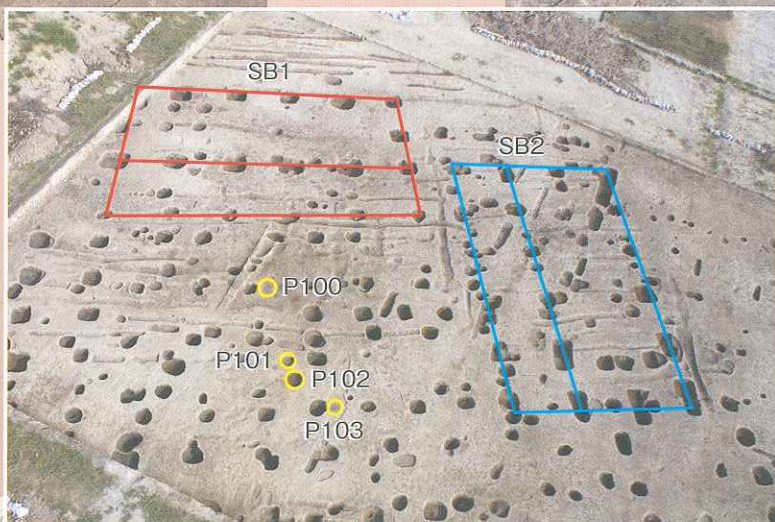
埋納遺構と大型掘立柱建物



▲埋納遺構101



▲埋納遺構100



▲大型建物と埋納遺構の配置

●SB1

●SB2

●埋納遺構



▲埋納遺構102



▲埋納遺構103